

特集にあたって

宇野 毅明（国立情報学研究所）

さきがけというファンドがある。若く志をもった研究者たちがいる。

研究とは、突き詰めて明らかにすることである。そのスタイルは職人やスポーツ選手の生業と似ている。大きく広く調べ、さまざまな角度から見て、深く考える。その研鑽の積み重ねから質の高い研究成果が生まれる。研究者は、研究を続けることで才能を獲得し、他者の追従を許さない存在へとになっていく。この点を鑑みると、研究というものは柔道や書道、料理道などと同じく「道」だと言えよう。個のもつ主観に沿って技術と哲学を極め、新しい地平を切り開く。研究者は道に殉ずる探求者である。しかし一方で、研究者には道以外の要求や役割が与えられる。社会的要請、教育、応用、産業。それらとの関わりは、時に道から外れることを強要し、そのことを快くなく感じる者もいる。だが果たして、研究とは道であるだけなのであるか。芸術やスポーツは、道の先の極まりに人の心をざわめかせる感動がある。道の先に人が集まり、人が集まらない道もその向きを変えることはない。研究は、あるいはビジネスも、研究自体が人に働きかける面がある。人々が思う、あるいは気づいていない問題意識を汲み取り、それに新しい知見を提供し、人類の英知を先に進め、人々の人生をよりよくする流れを作る。研究という道の極みに人の視線が向くのと同時に、研究も人に寄り添うのである。

研究者の仕事はなんらかの研究で世界一になることである。知られていないことを明らかにし、世界で最も質の高いものを生み出し、自身がある分野で他者によって置き換えられない人財となる必要がある。この、大きな時間と労力を伴う要件は、しばしば簡単な方法によって実現される。自分の研究の範囲を狭め、特殊化し、他者の才知が及ばぬところまで離れ、閉じる。そこに生まれた世界には一人しかいない。研究の道筋を自由に選べることはつまり、このような世界の構築をも許容している。

翻って、研究者の資質とは何であろうか。一般には、高い専門性を構成する知恵と技術だろうか。しかし、

知識はデータベースで、思考はAIで、技術はセンサと機械で代替えされうる時代において、これらは研究者の本質たりえない。研究者から、知識と技術を取り去ったら何が残るであろうか。研究者が他者より抜きん出ているところがあるとすれば、それは研究をすることによって培われるもの、思考、論理、理解、俯瞰、発想、生成、表現、伝達、広い視野などの力であり、それが他者に与える影響力、やがては世界のありようを変えうる発見のひとかけらを生み出せることであろう。それらは、矮小化された世界の中から発信されるものではない。多くの人の概念を包括するような大様な空間からこそ出てくる。

さきがけは国が運営するファンドの中でも異色の存在であり、その目的は若手一流研究者の養成にある。研究に必要な資金を必要なだけ提供するのではなく、額の大きな資金を枠として与え、その枠にはまる範囲での新しい研究課題の発案を要求する。理論研究者であっても、単に現在のスタイルを貫くのではなく、資金をつぎ込むことによる研究の加速を、なんらかの形で実現する、その発想を求める。研究テーマに関しても、現在までに積み重ねた成功体験の延長ではなく、異分野融合や新領域、つまり今まで誰も踏み込んだことのない荒野を、自身の才能と情熱で切り開いていく姿勢を求める。単に質の高い研究成果を出すのではなく、学術分野を、あるいは世界の人々を率い、代表するような研究者が排出されることが期待されている。さきがけ研究者とは、そのような挑戦に対して踏み出すことのできる才知と人格をもった若者なのである。

今回、5人のさきがけ研究者に寄稿をお願いした。いずれ劣らぬ強者ぞろいである。過去のさきがけ卒業生たちは、そのネットワークを通じて分野の中心的存在となった。彼らの進む荒野はビッグデータである。彼らの業が将来のビッグデータ学を構築し、彼らのネットワークはコミュニティの芯となり、情報学を牽引する力になっていくであろう。彼らの侍魂を感じていただければ幸いである。